

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：33936

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11263

研究課題名（和文）訪問看護における別居介護者支援モデルの構築

研究課題名（英文）Support model for caregivers living apart from their care recipients at visiting nursing

研究代表者

山根 友絵（Yamane, Tomoe）

人間環境大学・看護学部・教授

研究者番号：70734028

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、訪問看護における別居介護者支援モデルを構築し、その妥当性を検証することである。第1段階では別居介護者への支援経験を持つ訪問看護師へのインタビュー調査により、別居介護者支援の要素を抽出した。第2段階ではそれをもとに全国の訪問看護師を対象とした質問紙調査を行い、共分散構造分析により別居介護者支援モデルを作成した。第3段階では、別居介護者支援モデル項目の実施と別居介護者の介護負担との関連について調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで十分に研究が行われていなかった別居で介護を行う別居介護者への支援に焦点をあてており、訪問看護師への調査を踏まえて別居介護者支援の具体的なモデルを示している。そのため、本研究で明らかにした別居介護者支援モデルを活用することで、訪問看護師に対して別居介護者支援の方向性を具体的に示すことができ、訪問看護における支援の質向上にも寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to construct a support model for caregivers living apart from their care recipients at visiting nursing and assess its effectiveness. In the first stage, the elements of support for caregivers living apart from their care recipients were extracted by interviewing visiting nurses who have experience in supporting caregivers. In the second stage, based on the extracted elements of support, a questionnaire survey was administered to visiting nurses nationwide, and a support model for caregivers living apart from their care recipients was developed using covariance structure analysis. In the third stage, the relationship between support model item implementation and caregiver burden was investigated.

研究分野：老年看護学

キーワード：訪問看護 別居介護者 支援モデル 介護負担感

1. 研究開始当初の背景

わが国では、子どもと同居する高齢者は4割を下回っており、一人暮らしや夫婦のみの世帯が増加している。さらに要支援や要介護の認定を受けた高齢者のうち、半数以上が高齢者世帯ということから、要介護状態となっても一人暮らしや夫婦のみで生活する高齢者は多く、今後も増加することが予測される。

高齢者の介護の状況をみると、約6割は同居の家族が主な介護者となっているが、別居の家族等が介護者となっている者も1割を超えており、年々増加傾向にある。しかしながら、同居家族が介護を担う割合が高い現状から、これまでの介護者に関する研究は大部分が同居の介護者に焦点を当てたものであった。別居での介護は、介護者と被介護者である高齢者との間に物理的な距離が存在するという点で同居の介護とは異なり、先行研究からも介護の内容が異なっていることや、急変時の対応や被介護者の健康状態の悪化などに不安を抱えていることが明らかにされている(みずほ情報総研株式会社, 2012)。訪問看護の利用者のうち、一人暮らしや夫婦のみ世帯の高齢者は半数を占めており、また、別居介護者の不安の内容として、被介護者の疾患や健康状態に関することが示されているため、訪問看護師による別居介護者への支援の必要性は高い。

訪問看護における家族支援に関する研究は散見されるが、別居介護者への支援に関する研究は、ケアマネジメントに関わる専門職を対象とした研究が少数あるのみで、訪問看護師を対象とした研究はなく、訪問看護における別居介護者への支援については、これまでほとんど検討されていない。そこで、在宅高齢者を別居で介護する家族介護者の介護継続を支えるために必要とされる訪問看護師の支援を明らかにすることが重要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、訪問看護における別居介護者支援モデルを構築し、その妥当性を検証することを目的とした。これまで、高齢者を介護する家族介護者への支援については多くの研究が行われてきたが、大部分は同居での介護を前提としたものであった。核家族化が進行し、高齢者と子どもとの同居の割合が低下するなかで、別居や遠距離での介護も注目され、別居介護者に焦点を当てた研究も行われるようになったが、その多くは少数の事例研究や別居介護の特徴を明らかにするものであった。別居介護者への支援に関する研究もわずかにみられるが、ケアマネジメントに関わる専門職を対象としたものがあるのみで、訪問看護師を対象としたものは見られなかった。訪問看護師による別居介護者への支援の必要性は高いと考えられるものの、十分な研究が行われていない現状から、別居介護者に焦点を当て、訪問看護師による効果的な支援を明らかにするため、本研究を計画した。

3. 研究の方法

本研究では、第1段階として訪問看護師を対象としたインタビュー調査により別居介護者支援の仮説モデルを作成し、第2段階では、第1段階で作成した仮説モデルをもとに訪問看護師を対象とした質問紙調査を行い、最終的な別居介護者支援の構造モデルを構築する。さらに第3段階では、モデルの妥当性を検証するため、訪問看護師および別居介護者を対象とした質問紙調査を行い、モデルで示された支援の実施と別居介護者の介護負担感の関連について検討することとした。

第1段階では、別居介護者への支援経験がある訪問看護師を対象としたインタビュー調査を行い、質的な分析により別居介護者支援の8つの要素を抽出した。さらに要素間の関連について検討し、別居介護者支援の仮説モデルを作成した。

第2段階では、第1段階で作成した別居介護者支援の8つの要素に基づいて質問紙を作成し、別居介護者支援の重要性の認識と実施状況について、全国の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師を対象とした質問紙調査を行った。データは共分散構造分析により分析を行い、最終的な別居介護者支援モデルを作成した。

第3段階では、全国の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師と、支援を行う別居介護者を対象とした質問紙調査を行い、訪問看護師に対しては別居介護者支援項目の実施状況、別居介護者に対しては介護負担感についての調査を行い、訪問看護師による別居介護者支援の実施と、別居介護者の介護負担感の関連について検討した。

4. 研究成果

第1段階では、別居介護者への支援経験を持つ訪問看護師13名にインタビュー調査を行った。これまでに行った別居介護者に関する調査(山根, 百瀬, 2021)により、別居介護者の多くは60分以内程度の近距離に居住し、月2回以上の訪問をしていたことから、このような対象への支援に焦点を当ててインタビューを行った。研究参加者の年齢は30~50歳代で、性別は男性2名、女性11名であった。看護師経験年数は8~28年(平均17.2年)、訪問看護経験年数は3~22年(平均8.8年)であった。インタビュー内容を質的に分析したところ、別居介護者支援の要素として「限られた接点での初期からの関係作り」「離れている間の安心をもたらす緊急時対応」「情報のギャップを埋める連絡」「別居介護者の生活を優先した対応」等の8つのカテゴリを抽出した。同居の介護者への支援と共通する支援内容もみられたが、緊急時対応や別居介護者への連絡など介護者が別居していることで生じる特徴的な支援もみられた。さらに抽出された支援の要素について要素間の関係性を検討し、別居介護者支援の仮説モデルを作成した。

第2段階では、第1段階で作成した別居介護者支援の仮説モデルに基づき、インタビューデータを踏まえて質問項目を作成した。質問項目については、在宅看護専門看護師および訪問看護認定看護師による専門家会議を行い、内容妥当性を確保した。全国の訪問看護ステーション1000事業所に所属する訪問看護師2000名(各施設2名)を対象とし、別居介護者支援の各項目について、支援の重要性の認識と実施状況について質問紙調査を行ったところ、214名から回答が得られた(回収率10.7%)。共分散構造分析を用いて分析を行い、別居介護者支援の構造モデルを作成した。支援の要素間の関連について、【介護意欲を下げない関わり】【別居介護者自身の対応力を高める助言】【高齢者と別居介護者の状況を踏まえた状態悪化時の対応】の重要性の認識に正の相関がみられ、【介護意欲を下げない関わり】の重要性の認識は【限られた接点での初期からの関係作り】の重要性の認識に影響していた。また、支援の重要性の認識と実施状況の比較では、すべての要素で重要性の認識に対して実施状況が有意に低く、特に【限られた接点での初期からの関係作り】は実施状況が低かった。さらに支援の実施状況に関連が見られたのは、「職場内での上司や同僚からのサポート」のみであった。訪問看護の時間の制約の中でも別居介護者支援の実施を高めるため、職場内で上司や同僚からのサポートが得られる体制づくりの必要性が示された。

第3段階では、全国の訪問看護ステーションに所属する訪問看護師と訪問看護師が支援を行っている別居介護者を対象とした質問紙調査を行った。質問紙は訪問看護師と別居介護者が1組になるように配布した。訪問看護師を対象とした質問項目については、第2段階で作成した別居介護者支援モデルに基づいた項目とし、支援の実施状況について回答を得た。別居介護者を対象とした質問項目については、別居介護者の介護負担感を荒井らが作成した Zarit 介護負担尺度日本語版(J-ZBI)を用いて調査した。全国の訪問看護ステーション4000事業所を対象に研究協力依頼を行い、承諾の得られた86事業所に計249組の質問紙を配布した。質問紙の返送があったのは、訪問看護師152人(回収率61.0%)、別居介護者116人(回収率46.6%)であった。別居介護者の定義に該当しないもの、介護負担尺度項目に欠損のあるもの、訪問看護師の支援項目に欠損のあるものを除き、訪問看護師149人(有効回答率98.0%)、別居介護者104人(89.7%)を分析対象とした。訪問看護師と別居介護者双方から回答があり、マッチングできたのは92組であった。別居介護者の年齢は50~60歳代が80.7%であり、男性31人(29.8%)、女性73人(70.2%)であった。介護負担尺度(J-ZBI)得点は平均28.9点であり、抑うつ症状を呈する可能性のある25点以上のものが56人(53.8%)を占めた。自由記述内容を分析したところ、別居介護に伴う負担として、「自宅と高齢者宅の往復」「すぐに駆け付けられない」「2つの家庭の維持」「高齢者の状況の把握が困難」などがみられ、サービスへの要望として「通院の同行」「ちょっとした生活支援」「交通費の補助」などが挙げられた。訪問看護師による支援モデル項目の実施状況と、別居介護者の介護負担感との関連は明らかにできなかったと言えなかったが、別居介護者の介護負担の現状について明らかにすることができたため、今後は、介護負担の現状を踏まえて支援モデル項目の精選を図っていく必要がある。

<引用文献>

- みずほ情報総研株式会社(2012). 家族介護者の実態と支援方策に関する調査研究事業~別居介護・遠距離介護をめぐる実態と支援のあり方~報告書.
- 山根友絵, 百瀬由美子(2021). 訪問看護ステーションにおける別居介護者支援の現状. 日本看護科学会誌, 41, 630-637.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山根友絵, 百瀬由美子	4. 巻 41
2. 論文標題 訪問看護ステーションにおける別居介護者支援の現状	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護科学会誌	6. 最初と最後の頁 630 ~ 637
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.41.630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山根友絵, 百瀬由美子	4. 巻 26
2. 論文標題 訪問看護を利用している一人暮らし高齢者を介護する別居介護者の経験 近距離から通う娘に焦点を当てて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山根友絵, 百瀬由美子
2. 発表標題 訪問看護ステーションにおける別居介護者支援の現状
3. 学会等名 日本看護研究学会第47回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根友絵, 百瀬由美子
2. 発表標題 近距離に居住する別居介護者への訪問看護における支援の構造
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根友絵, 百瀬由美子
2. 発表標題 近距離から通う別居介護者への訪問看護における支援の構造モデル
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根友絵, 百瀬由美子
2. 発表標題 別居介護者への支援における訪問看護師の困難と対処
3. 学会等名 日本老年看護学会第25回学術集会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	百瀬 由美子 (Momose Yumiko) (20262735)	日本赤十字豊田看護大学・看護学部・教授 (33941)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------